

平井俊顕

『ケインズ・シュムペーター・ハイエク』

—市場社会像を求めて—

ミネルヴァ書房 2000.7 xii+380 ページ

20世紀を代表する3人の経済学者は誰かと問われれば、本書のタイトル通り、私も迷わずケインズ、シュムペーター、ハイエクをあげるだろう。ただし、私ならば、順番を入れ替えて「シュムペーター・ケインズ・ハイエク」とするところだ。なぜなら、この3人はまさにこの順番で、20世紀における経済学のみならず現実経済に多大なる影響を与えるような経済思想を形成し、その支配的な地位を交代してきたからである。

本書はその紙幅の三分の二をケインズ研究に当てているのだから、ケインズが先頭に来るのは当然ともいえるかもしれない。だが、このことはたんに本書で扱われている分量の比重によるものではない。たとえば、「あとがき」で著者自身が「それ(集団心理的性向：評者)は既述の貨幣フェティシズムとともに、市場経済の脆弱性を直撃する危険性をはらんでいる。これを止める力は政府にしかない」(334：以下、カッコ内の数字は本書頁)と述べているように、市場の脆弱性や不安定性を制御しうる唯一の主体が「政府」であると著者は考えている。自らの市場社会像においても、三人のうちケインズに特権的な地位を与えているのである。このように、「ケインズとシュムペーター・ハイエク」というのが本書の実際の内容に近い。

このことは、本書における課題設定の二重性にも現れている。

第一の課題は、ケインズの全体像を経済学者としてだけでなく、思想家、文化人そして人間として立体的に描き出すことであるとされる。第1章から第7章は、19世紀末から戦間期、そして第二次世界大戦までをケインズの目を通して伝記的・年代記的に叙述し、ケインズの経済理論や経済政策に加えて、時代状況、家庭、交友、思想・文化について幅広く論じている。1920年代から30年代への理論的変遷(「発展」)や政策立案過程が克明に描き出されているし、ブルームズベリー・グループやメモワール・グループを紹介する第6、7章も興味深い。ムーア倫理学の影響やケインズのホモ・セクシュアリティ

に関するエピソードも含まれ、著者の研究がいかに多面的で精密であるかが見事に証明されている。

第3章で議論されている、『貨幣改革論』から『貨幣論』、そして『一般理論』へと至るケインズの理論的変遷過程に関する部分は、著者の『一般理論』形成史研究を要約したものである。それによれば、ケインズは、『貨幣改革論』刊行直後から、投資、対外投資、貯蓄といったマクロタームで失業を論じ、利子率や公共投資といった政策変数を導入するようになった。同時に、ケンブリッジ型貨幣数量説に基づく「基本方程式」や「購買力平価説」を棄却した。それゆえ、『貨幣改革論』から『貨幣論』への飛躍は、『貨幣論』から『一般理論』への飛躍よりも大きい。また、『貨幣論』において「ヴィクセル・コネクション」の流れを汲む「貨幣的経済学」が導入され、『一般理論』では、「ヴィクセル・コネクション」を否定する「不完全雇用均衡の貨幣的経済学」が樹立されたのである。こうした一連の著者の主張は、著者が重視する「ヴィクセル・コネクション」を中心にして組み立てられている。だが、『貨幣論』は、ケンブリッジ現金残高方程式に依拠しているのであって、著者がいうほど「ヴィクセル・コネクション」は顕著な特徴であるといえるかどうか。また、『貨幣論』が「実現利潤」を刺激として企業が来期の生産拡張を行うような「TM供給関数」を採用していたのにたいし、『一般理論』は「古典派の第一公準」を受容することで「TM供給関数」を捨て、そのことによって投資・貯蓄の均衡を前提とする利子と所得(雇用量)の同時(同時期)決定モデルを構成することができたのではないか。そうならば、『貨幣論』から『一般理論』への変遷は、過程分析(過渡期の分析)の消失を含んでいるのであり、必ずしも「発展」とばかりはいえないだろう。

本書のもう一つの課題は、ケインズと彼の同時代の経済学者シュムペーター、ハイエクの市場社会観を検討し、著者の「市場社会像」を示すことである。これは、ケインズ研究という枠組みを超えた経済思想・理論的な課題である。分量と内容から見れば、第一の課題が主、第二の課題は従ではあるが、後者は本書を貫く著者のヴィジョンを示すとともに、現実世界にも大きな含意を持つがゆえに、よりいっそう重要である。にもかかわらず、第二の課題は十分に成功しているとはいえない。第8章以降も著者は丹念に引用を重ね議論を展開しているのだが、論述がやや単調であり、いたって平板な印象を受ける。なぜなのか。

本書は、ケインズ研究を主軸としているだけではなく、ケインズの市場社会像を前提としている。それゆえ、三者三様の資本主義・市場社会論が並列的に提示されているものの、彼らを批判的に対話させつつ、3人のヴィジョンを立体的に総合化する契機に乏しいのだ。もし第二の課題に集中するならば、ケインズをも相対化する視点から、20世紀の歴史の流れの中に三者を配置すべきではなかろうか。

著者が提示する彼らの共通点は、彼らが実物と名目の二分法、貨幣数量説、ワルラス的均衡理論を批判し、「貨幣的経済学」を模索したことである。つまり「ヴィクセル・コネクション」にあるという。ならば三者の違いはなにか。ケインズは、貨幣愛本能と似而非道徳が支配する資本主義を批判し、自由放任主義は不安定と停滞を導くと説く。そこから政府による管理という政策論が出てくる。一方、シュムペーターは、信用創造を利用する企業者が創造的破壊を行うことにより循環が生じる動態的経済であると考えている。内生的に変化する長期動態過程を客観的に描いているので、政策論がない。最後に、ハイエクの市場論(「カタラクティクス」)は、「現場の人の知識」をもつ経済諸主体、情報の伝達機能を有する「価格システム」、及び、「予見されざる変化」への適応原理としての「競争」など、リアリステックな市場認識を示している。だが、その「自生的秩序」論は、巨大企業や労働組合、国家の役割の増大という事実を無視した、観念的な市場の社会哲学であり、そこに価値評価が含まれている。

著者のこの整理を詳細に検討する余裕はないので、評者の疑問を端的に述べる。著者が、シュムペーターの動態的資本主義論やハイエクの市場論にリアリティを認めるならば、ケインズの市場社会像、そしてそれを受容する著者自身のそれも一定の変更や修正を迫られるのではないのか。そのような内在的な相互批判があるなら、三者の比較検討はもっと実り豊かなものになろう。しかし本書にはそうした視点が希薄である。著者は、「ハイエクの市場社会像は「現実の」市場社会に存在する重要な要素が捨象される形で概念構成されている」(295)と批判している。これが正しいならば、著者自身の市場社会像に関しても同じことが当てはまるのではないか。

著者は、ケインズ自身の市場社会像には明白な立場のシフトがあることを指摘している。1920年代のケインズは、資本主義を効率性および技術的改善の可能性という見地からは是認したが、それを道徳性の観点からは否認していた。しかし、自由放任の資

本主義経済では公共善は達成されないので、国家による管理を必要とすると考えた。しかるに、『一般理論』以降、市場社会の積極的な側面、すなわち個人的自由と生活の多様性を認め、市場社会の道徳性を肯定するようになった。ここでは、1920年代のケインズが批判したのは「資本主義」であり、晩年のケインズが是認したのが「市場社会」であることにも注意を要する。このねじれの背後に、ソ連の変質やナチスの台頭という現実の変化があったことは想像に難くない。それなのに、著者はケインズのシフト後の立場を市場社会論の到達点であるにとらえ、それを「完全な自由放任社会を一方の極に、完全な計画社会を他方の極にもつスペクトラムにあって、市場社会はその中間に位置している」(216)とまとめている。しかも、その時代背景を無視して、これが現代でも通用する認識であると素朴に考えている。われわれは、ケインズ以後に起きた現実上の変化をいくつも経験し、今また自由主義的な資本主義の諸問題に直面している。評者は、ケインズの資本主義批判に可能性を見る一方で、問題の解決をもはや国家に求めるわけにはいかにないと考えている。

ここ10年の日本の経済状況を見てみても、政府による金融・財政政策はほとんど功を奏していないし、財政赤字は膨れるばかりである。しかも、既得権益を擁護し、利益を誘導する官僚と政治家の行動が資源配分や情報伝達の効率性を歪める「政府の失敗」も顕著である。こうした現実を前にして、どうして「不況時における市場社会のもつ欠陥」を「救えるのは政府しかない」(333)、「市場社会は、完全な自由放任と完全な社会主義を両端にもつスペクトラムの中間にしか位置しえない」(335)と、ケインズ晩年の市場社会像を追認するにとどまれるのかが不思議である。これは、第二次世界大戦後の西側世界を席卷し、いままさに頓挫しつつある「福祉国家」の思想である。しかも、そのスペクトラム自体、「市場と計画」という新古典派の二分法的な構えを前提とするものだ。1990年代以降の「現実」は、もはやこうした思想や了解図式が通用しなくなったことを告げているのではないか。

市場は必要だが資本主義を放任すべきではない。と同時に、国家を救世主と考えることはできない。まず、このジレンマをしっかりと見据え、「市場社会論」の意義を問い直すことが必要であろう。その上で、前世紀の経験の中にあの3人の巨人たちを主体的に再構成するならば、新たな市場社会像が展望できるのではなかろうか。

[西部 忠]